

読者の皆さまはこの方を「存じでしようか？」

全盲ろうの現役東大教授・福島智（ふくしまさとし）先生です。今月号の冒頭では、この福島氏をケーススタディーにして考えを巡らしたいと思います。

福島氏は兵庫県神戸市出身で、生後五ヶ月で眼病を患い、二歳で右目、九歳で左目を失明されます。十八歳の時に突発性難聴で失聴し、全盲ろう者となられました。そのため、十八歳までの音の記憶が残っており、自分の声を聴くことは出来ませんが、よどみなく口で発話することが出来ます。実際、講義や講演会でも発声して話をしておられます。また、ピアノ演奏も行います。そんな福島氏のお母様が考案された**指点字**を使い、会話とコミュニケーションが可能で、**指点字**は全国の盲ろう者に広く知られ、盲ろう者のコミュニケーション手段の新たな選択肢となっております。

福島氏は**指点字**でコミュニケーションをとれるようになるまでの心境や、コミュニケーションの大切さなどを述べ懐かれておられます。

以下、福島氏の言葉を抜粋引用させて頂きご紹介いたします。

盲ろう者となり自由に言葉を交わすことができなくなると、コミュニケーション

ションが水や空気が食べ物のように、生きる上で絶対に必要なものだと私は痛感しました。

「コミュニケーションは心の酸素」と私は言っているのですが、コミュニケーションがないと、人は窒息してしまおうのです。私は実際にコミュニケーションが十分に取れずに窒息しそうな状況も経験しました。イメージとしては、宇宙空間の中に、たった一人だけ置き去りにされ、酸素ボンベから少し酸素が送られてきたかと思ったら、すぐに止まってしまおうという非常に不安な状況でした。あるいは、水の中に顔を突っ込まれて、息ができなくなると、しばらくして顔を引きあげられ、一瞬息ができたと思ったらまた沈められて……という拷問を受けているようなものです。そんな私に最初に空気を供給してくれたのが母でした。母が最初に指点字で呼びかけてくれた。

「さ」とし「わ かる か」という言葉や、友達の「よ う や く も ど つ て き た か」という一言が私の力になっていきました。今から思えば真つ暗闇の宇宙に、ただ一人漂う私に再び光を当ててくれた瞬間だったと言ってもいいでしょう。

平成十二（2001）年十月、歴史上初めて国際的な盲ろう者団体

「世界盲ろう者連盟」が発足した時、指点字によって真つ暗の真空状態から救わ

れた時の感動を私は詩にしました。これをここで紹介します。

●福島智の詩

指先の宇宙。ぼくが光と音を失ったとき、そこには言葉がなかった。そして世界がなかった。僕は闇と静寂の中でただ一人、言葉をなくして座っていた。僕の指に君の指が触れたとき、そこに言葉が生まれた。言葉は光を放ちメロディを呼び戻した。ぼくが指先を通して、きみとコミュニケーションするとき、そこに新たな宇宙が生まれ、ぼくは再び世界を発見した。コミュニケーションはぼくの命。ぼくの命はいつも言葉とともにある。指先の宇宙で紡ぎ出された言葉とともに……

この福島氏の詩からも分かる様に、私達人間は、人と交わり、コミュニケーションを取る事がどれほど生きていく上で重要なものなのかを改めて考えさせられるわけです。

「人」という文字が二本の棒が支え合っ出て来ているように、人は一人では生きていけません。常に自分以外の人達との関わりの中で生きています。いや「生か合っている」とも言えます。現代社会は本当に便利な物で溢れています。お陰で快適に生活できる訳なのですが、この

●「便利の定義は「人と話さないこと」

「自動販売機（食券なども）」、「自動改札」、「インターネットの売買」などがそうですね。つまり、誰とも接触せずに事を済ませることができると、便利の定義になってしまいました。生身の人間とは挨拶すら交わすことができないのに、インターネットやメールの世界は大盛況というわけです。これはコミュニケーションではなくて、ルールの無い一方通行のワガママな世界です。

●「権利」には「義務」が伴い、

「自由」には「信用」が伴います。一方通行のルールの無い世界では、義務も信用も必要ありません。ただただ権利と自由を謳っているだけです。

「権利」の肥大は、不平不満や文句を誘発するだけです。また大きな「自由」がほしければ、大きな「信用」を積みこいでしよう。子供達は「自由」が好きです。しかし放っておくと安易な「自由」を求めるようになります。「自由」はタダでは手に入りません。とは言え、お金で買えるわけではなくて、お金の代わりに「信用」が必要になります。どれだけ信用を築くかによって、自由の量も大きさも変わってきます。自分のやりたい事や目標達成の為に

「権利」と「自由」が不可欠です。その為には「義務」を果たし「信用」を築かなければなりません。

●『挨拶』は人間に与えられた高等能力

朝、小学生達は集団登校をしています。子供を見送るついでに集団登校の子供達を笑顔で迎え、大きな声で「おはようございます」と言っても、シラッ・・・

返事が返ってきません(苦笑)。聞こえなかったのかな?と思ひ、更に大きな声で「おはようございます!」と声を投げかけますが、やはり「おはよう」の一言が返ってきません。数日間続けて試してみると、目でアイコンタクトする子はいいても、やはり「おはようございます」という気持ちの悪い挨拶が返ってきませんでした。驚いた私は先生方に尋ねてみると、「学校では挨拶をするのですが」と、先生方も首を傾げておられました。

冒頭にご紹介した福島氏の詩を引き合いに出すまでもなく、コミュニケーションは人間に与えられた最も高等な能力の一つです。そして方が一の有事の際には「便利な物」は使えません。そこで一番大切なのは、互いのコミュニケーションを駆使して協力し合うという事は言うまでもありません。会話

を通して自分の気持ちを表現する。そして相手の気持ちを慮ることのできる能力を育てる事は、生きていく上で必須の条件です。そんなコミュニケーションの基本の中の本中とも言える「挨拶」ができない子がいるという現実が、現代社会の膿として垣間見られるようになってしまいました。これは家庭教育・躾教育の問題ですが、もはや社会全体の問題でもあります。このまま挨拶もロクにできない子供達が成長して大人になったら、どんな世の中になってしまうのでしょうか?この現実を目の前に、ただ指をくわえて見ているわけにはいきません。社会全体で、私達大人がもつとコミュニケーションする社会を創り、互いに協力する姿を通して、次世代の子供達へ大きな背中を見せつけていかなければいけないのではないでしょう。親御さんから、家庭から、町や村から、そして社会全体の大人達が、各々に意識しなければ、「便利」という耳障りの良い墮落の道へ落ちていってしまうのではないかと思います。

●道徳を通して見詰める吾が心

先月号でも触れましたが、一月二十二日を皮切りに「大町小学校」の子供達へ道徳の授業を開講させていただく事になりました。校長先生も素晴らしい方で、近年挨拶ができない子、相手の気持ちを考えることができない子が目立ってきた

事を危惧されておられ、私の直談判の申し出を二つ返事で快諾して下さいました。

「道徳」は、他を思い遣る心を養う事です。道徳教育の振興と充実をはかり、いざれ真成寺で「寺子屋(てらこや)」を本格開校したいと思っています。「仏教」は、自分の心を知り養う教えます。道徳から仏教の真髓まで伝承できるように、引いては世の中に少しでも笑顔の花を咲かせることができるように精進して参ります。

最後に私の心を揺り動かす言葉を、紹介して筆を置きたいと思ひます。

教育とは、流水に文字を書くように儂い業である。だが文字を岩壁に刻むような真剣さで取り組まねばならない。

合掌 副住職 谷川寛敬

